

3 歳児の運動発達

- 2 歳児の活動経験から見て -

○渡邊満夫 (村山中藤保育園) 高橋保子 (村山中藤保育園)

◎研究目的

本研究のきっかけとなったのは、三歳を二年連続して担任しているなかで、子ども達の運動発達にかなりの違いがあるように感じたことからであった。そこでなぜほぼ同じ月齢の子どもたちでありながらそのような違いが見られるのか、2歳時期の活動経験との関連性から探ることにした。

そこでまず、本研究者がどのような点において運動発達の違いを感じたのか明確にしておこうと思う。

第一点として、巧技台(組み合わせ遊具)における遊び方、取り組み意欲の違いである。H14年度の3歳児は初めの段階から高さに対して恐怖心を持っている子が多く、慣れるのにも時間のかかる子が多かったのに対して、H15年度の3歳児は高さに対して恐怖心を持つ子も少なく、全体的に順応性が高くスムーズに渡れる子が多い。

次に第二点目としては、園外保育における違いである。頻繁に出かける園外保育のコースを比較してみても、Aはおよそ2キロ程度、それに対してBはおよそ3キロ～4キロ程度のコースに出かける機会が多く、Bの方が日常的に長い距離を歩いている。そして、その距離の違いの背景にはAとBの精神発達の違いもあるように感じている。園外保育には運動発達以外にも社会性や協調性、精神力など様々な要素が必要になってくる。より長い距離を歩くことが出来るということの裏には、そのような要素の違いもあるのではないかと思うのである。

以上の二点において特に運動発達の違いを感じた訳であるが、それは担任としての主観だけでなく当園において運動指導をして下さっている先生や他の保育士も同じ考えを持っていたことを加えておく。

◎方法

今回比較する3歳児は、東京都郊外にあるM保育園園児のH14年度の3歳児52名(以下Aグループ)とH15年度の3歳児51名(以下Bグループ)である。

比較するに当たっては、当時の保育記録(指導計画・保育日誌)、保育園が年齢ごとの発達を確認するために独自に作成している発達確認項目、担任からの聞き取り調査の結果を参考にした。

なおAとBの運動能力の差異を究明するための視点として、①3歳時期の巧技台と園外保育の頻度、②3歳児発達確認項目による比較、③2歳児発達確認項目による比較、④2歳時期の巧技台と園外保育の頻度、以上の4点から分析を行った。

◎結果

①3歳時期の巧技台と園外保育の頻度について

表-①によると、巧技台と園外保育においてそれぞれ4回の差が表れている。これを見てみると子どもにとって経

験の差がそれぞれにおける発達の違いという形で表れてきているのかもしれない。

<表-① 3歳児 巧技台と園外保育の回数の違い>

| | A | B |
|------|---|----|
| 巧技台 | 3 | 7 |
| 園外保育 | 8 | 12 |

②3歳児発達確認項目による比較

次に、当園で各年齢において必要とされる発達項目(保育所保育指針、幼稚園教育要領参考)を4月・9月・3月の年に3回個々に確認しているものがあるが、その中で運動に関する項目を参考にAとBにおいて運動発達の違いがあるのか見てみる事にする。確認項目は以下の通りである。

<<3歳児クラス用 発達確認項目>>

- ①外で十分体を動かしたり、様々な遊具や用具などを使った運動遊びを楽しむ
- ②進んで外で身体を十分に動かして遊ぶ
- ③うんていにぶら下がり手を離して着地出来る
- ④ギャロップが出来るようになる
- ⑤遊びの中でスキップの動きを真似て楽しむ

| | A | B |
|---|----|----|
| ① | 24 | 17 |
| ② | 15 | 9 |
| ③ | 0 | 0 |
| ④ | 0 | 6 |
| ⑤ | 2 | 0 |

<表-② 3歳児発達確認項目の件数>

* 9月末まで

発達確認項目の比較においては、Aの方が積極的に体を動かしている子が多い傾向にある事が伺えるが、それ程大きな差は見られない。そこで、3歳児における保育だけでなく、2歳児における保育までさかのぼって考えてみることにする。

③2歳児発達確認項目による比較

3歳児発達確認項目の比較と同様に2歳クラス用発達確認項目において比較を行った。

<<2歳児クラス用発達確認項目>>

- ①体を自分の思うように動かす(走る、跳ぶ、リズムミカルな運動や音楽に合わせて体を動かす)
- ②両足でビヨンビヨン跳ぶ
- ③物にぶら下がる
- ④滑り台でスピードに対応し、体でコントロールして滑る
- ⑤手すりに掴まり一段ごとに両足を揃え階段を上がり下がりする
- ⑥ぶらんこに立って乗れる
- ⑦三輪車に乗ってこぐ
- ⑧足を交互に出して階段を上がる

- ⑨片足ケンケンが出来る。ぎこちないが走る
 ⑩全身で走り回る
 ⑪鉄棒に跳び上がる
 ⑫三輪車のハンドル操作をし、自由に乗りこなす

<表-③ 2歳児発達確認項目の比較(人)>

| | A | B | | A | B |
|---|----|----|---|----|----|
| ① | 32 | 37 | ⑦ | 33 | 35 |
| ② | 40 | 36 | ⑧ | 33 | 32 |
| ③ | 29 | 29 | ⑨ | 24 | 19 |
| ④ | 40 | 38 | ⑩ | 29 | 36 |
| ⑤ | 42 | 37 | ⑪ | 3 | 0 |
| ⑥ | 6 | 2 | ⑫ | 25 | 30 |

表-③の結果を見てみると、両者の数値に大きな差は見られていない。

それでは、なぜ3歳児の子ども達を見ていて巧技台や園外保育において発達の違いを感じたのであろうか。そこで、更に2歳児の時の保育記録をあたってみることでそれぞれの経験している頻度について検討してみた。

④2歳時期の巧技台と園外保育の頻度についての比較

<表-④ 2歳児 巧技台、園外保育の回数(回)>

| | A | B |
|------|----|----|
| 巧技台 | 8 | 15 |
| 園外保育 | 12 | 16 |

表-④からそれぞれの経験の違いを見てみると、巧技台や園外保育の回数は、どちらもBの方が多く経験している。そして、その結果は3歳児における巧技台と園外保育の経験の比較においても同様で、Bの方が多く経験していた。

そのことから考えていくと、運動発達において経験の差というものがある幼児にとって運動能力の獲得の違いに大きく影響するのではないかと考えられる。

◎考察

近藤(1)によると、幼児の運動技能の獲得の過程は、ハイハイや歩くといった移動運動の技能は0~2歳までの間に獲得されていく。更に、走る、跳ぶ、よじのぼるといった基本運動の技能は2歳~6歳までの間に獲得されていく。今回比較の対象として挙げた巧技台は、跳ぶ、バランスをとる、よじのぼる、といった基本運動の技能を全て満たした運動であるといえる。又園外保育は、歩くことは勿論のこと、持久力、更に精神的な発達や社会性など様々な発達を促すものである。つまり、基本運動の技能を獲得していかなければならない2~3歳という時期において、これらの運動は最も大切であり、必要な運動の一つであるといえるのではないと思う。更に付け加えるならば、そのような大切な時期に巧技台や園外保育といった運動の経験が少なくなってしまうことで、幼児の運動技能は促されず、それだけ獲得に時間がかかってしまったり経験不足から苦手意識へと繋がってしまうということも考えられる。そのような点から考えると、やはり2歳児からの経験の少ないA

は運動技能の獲得が遅れてしまっている子が多いのではないか。そして、それが巧技台における高さに対する恐怖心や手足の運びの曖昧さや、園外保育における長距離を歩くことの難しさなどに繋がってくるのではと考えられる。

更に運動技能の獲得の過程を見てみると、移動運動技能、基本運動技能の獲得、その上にスポーツ的・ゲーム的技能、スポーツの技能の獲得というものがある。スポーツ的・ゲーム的技能の代表的なものとしてドッジボールなどが挙げられ、又スポーツの技能にはサッカーやなどが挙げられる。それらを考えた時にどれも走る、跳ぶといった基本運動技能が土台となっており、仲間と一緒に楽しむ協調性や社会性というものも必要になってくる。つまり、基本運動技能の獲得というものは、今後の運動技能の発達において大きな影響を及ぼすだけでなく、精神的な発達においても何らかの影響を及ぼすのではないかと考えられるが、今回の調査においてはそこまでの関連性を断定していくことは出来ず、今後保育に携わっていく中で関連性を調べていきたいと思っている。

◎まとめ

3歳児の運動発達において最も重要なのは、基本運動技能を獲得していく過程である2歳児からの保育ではないかと考えられる。その大切な時期に巧技台や園外保育をはじめ様々な運動遊びを経験することが、結果的に走る、歩く、跳ぶ、バランスをとるといった様々な基本運動技能を促し、獲得していくという事に繋がっていく。そして、それら運動技能を獲得していく過程において、精神力や社会性、協調性といった要素までも獲得していくのではないかと考えられる。つまり、2~3歳児という基本運動技能を獲得していく時期にいかに様々な運動発達を促すような経験を多くしていくことが出来るかということが、結果的に4~5歳になっても運動能力の差になって表れていくのではないのだろうか。そしてそこで大切なのは、目の前の子どもの姿や興味・関心などをしっかりと捉え、それらの姿に応じて今の子ども達にはどのような運動遊びが必要なのかということを考えて上で、しっかりと保育計画を立てていく事だと思う。つまり保育士は、子どもたちの姿を見て、例えばよじのぼったりバランスをとるといった運動発達が足りないと判断すれば、それらを巧技台という一つの運動経験を通して促していくことが必要になってくる。逆に保育士の見方の中で、そのような運動発達が満たされていると考えられたとすれば、巧技台という運動経験は少なくなるのかもしれない。いずれにしても、保育士の立てる保育計画によって、子どもたちの姿というものは大きく左右され運動発達にも大きな違いが生じるということは考えられる。私たちはそのことをしっかりと受け止め、幼児の姿や興味・関心というものを把握した上で保育計画を立てていくだけでなく、しっかりとそのことを実践していかなければならないと思うのである。

(1) 参考文献 近藤充夫 『領域 健康』 p.21

同文書院